OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『建礼門院右京大夫集』七夕歌群の再検討
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	詞林. 2014, 55, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『建礼門院右京大夫集』七夕歌群の再検討

丹下　暖子

一、はじめに

『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』）には、「七夕歌群」と称される、五十一首の七夕歌から成る歌群（271～321）がある。「年々、七夕に歌をよみてまゐらせしを、思ひ出づるばかり、せうせうこれも書きつく」という詞書に続く五十首に、歌群を締めくくる一首という形の歌群である。五十一首という歌数は、『右京大夫集』の総歌数の約七分の一に及ぶもので、これほど多くの七夕歌を採録する私家集は他に例がない。また、歌群には、七夕の伝説や風習を詠んだ歌のほか、右京大夫の恋人、平資盛没後の心境を詠んだと思しい歌が見え、『右京大夫集』の資盛の追慕という主題も深く関わってくる。

こうした事情から、七夕歌群に注目する論考は多い。まず『右京大夫集』の構成という観点から、後鳥羽天皇への再出仕歌群（322～356）の直前に位置する七夕歌群は、歌群までに書き綴ってきた資盛との関係を中心とする思い出を締めくくるものとされてきた[1]。歌群内の歌については、およそ詠作年次のままに並ぶとされており、詠作時期などの推定を試みる論考[2]もある。詠作時期に関しては、八年から十年にわたって詠まれたもので、資盛と別れた後、後鳥羽天皇に再出仕するまでの間の「年々」の七夕歌とする[3]のが通説的である。

詠作年次順の配列を前提とするこれらの見解に対し、先行歌からの表現摂取状況に注目する藏中さやか氏[4]は、七夕歌群内に同一歌集の表現を踏襲する歌が分散して配されていることを指摘し、「五一首という形に整備しているこの歌群においては詠作年次のままに和歌を並べたと考えるよりも詠じ置いた和歌の中から適当なものを選び出して配列したというほうが適当であり、長年の思いを効果的に表現するためにおこなった意図的な配列を想定すべき」とする。これまでの論考の前提部分に関わる指摘であり、歌群そのものを捉え直す必要が生じたと言えるだろう。

そこで本稿では、七夕歌群の配列や表現の特徴を再検討し、『右京大夫集』における位置づけを考えたい。そして、五十

一首もの七夕歌から成る歌群が形成される背景についても探ってみたいと思う。なお、七夕歌群の全容については、本稿末尾に【表】として示した。

二、七夕歌群の配列

七夕歌群の配列は詠作年次順とされてきたが、先述のとおり再検討を要する。五十一首もの七夕歌は、どのように並べられているのか。本節では、配列面から歌群を捉えてみる。

具体的に配列を見てゆく前に、七夕歌群の冒頭と末尾を確認しておく。歌群は次のように始まる。

年々、七夕に歌をよみてまゐらせしを、思ひ出づるばかり、せうせうこれも書きつく

七夕のけふやうれしさつゝむらんあすの袖こそかねて知らるれ（271）

詞書には、毎年、七夕に歌を詠み手向けてきたこと、その中から思い出したものだけを書きつけたことが述べられている。この詞書に続けて271番歌以下五十首の七夕歌が並び、最後に次の321番歌が付される。

このたびばかりやとのみ思ひても、又数つもれば

いつまでか七の歌を書きつけん知らばやつげよ天の彦星（321）

321番歌では、年々積もってゆく七夕歌を前にして、いつまで詠み続けることになるのかと彦星に問いかける。歌群を締めくくるにふさわしい歌であるが、ここでは、上句が七夕に歌を詠み、七枚の梶の葉に書きつけるという風習を踏まえた表現であることに注意しておきたい。五十首の七夕歌に付された詞書にも、「年々、七夕に歌をよみてまゐらせしを」とあった。歌群の冒頭と末尾で繰り返し言及する、七夕の風習の中で歌を詠むということは、右京大夫が七夕歌を並べてゆく際に強く意識していたことと、まず考えられるだろう。

このような詞書と一首が付された五十首の七夕歌は、どのように配されているのだろうか。

配列に関しては、後藤重郎氏[5]の指摘がひとまず参考となる。後藤氏は、七夕の特殊行事・特殊用語を詠んだ歌や、七夕後朝を詠んだ歌が歌群内に散見することに着目し、歌群が八群から十群に分かち得るものであることを指摘している。以下に挙げる八首は、後藤氏が歌群を分かつ際に区切りとした七夕後朝の歌である。

天の河こぎはなれゆく舟の中のあかぬ涙の色をしぞ思ふ（276／①[6]）

年をまたぬ袖だにぬれしし〳〵めに思ひこそやれ天の羽衣（282／②）

七夕のあかぬ別れの涙にや雲のころもの露かさぬらん（291／③）

あひにあひてまだむつごともつきじ夜にうたて明けゆく天の戸ぞうき（298／④）

露けさは秋の野辺にもまさるらしたち別れゆく天の羽衣（304／⑤）
彦星の思ふ心は夜深くていかにあけぬる天の戸ならむ（305／⑤）
かさねてもなほや露けきほどもなく袖わかるべき天の羽衣（310／⑥）
えぞ知らぬしのぶゆゑなき彦星のまれに契てなげく心を（315／⑦）

それぞれ傍線部には、七夕後朝を示す表現が見られる。最後の315番歌には、典型的な表現はないが、「まれに逢うと約束して（別れに際して）嘆く」と解釈することができるだろう。

本稿でも、これら七夕後朝の歌を歌群内の区切りと見て、五十首を①から⑧の八群に区分して考えてゆくこととする（本稿末尾の【表】参照）。このように区分した上で、残りの七夕歌に注目すると、①から⑧各群内の配列もおおよそ説明がつき、歌群全体の配列についても捉えることが可能となるからである。以下、順に検討しよう。

右京大夫の七夕歌に注目したときに気がつくのは、七夕歌が、その主題とする事柄により大きく二つに分類されるということである。具体的には、次のように分類することができる。

一つは、七夕伝説や風習を詠むことを主題とする歌である。歌群冒頭の271番歌のように牽牛織女の様子を推量する歌のほか、牽牛織女に対する同情、七夕の契りの永遠性を詠んだ歌、七夕の風習と関連する歌など、十六首ある[7]。先に取り上げた七夕後朝の歌を併せると、二十四首で、歌群のほぼ半数に相当する。

もう一つは、七夕に寄せて右京大夫自身の境遇を詠むことに主眼を置く歌である。牽牛織女にも厭われ、あるいは劣る我が身を詠んだ歌のほか、牽牛織女に自身の境遇を訴える歌、「世の中」の変化と七夕の永遠性、七夕につけての物思いや悲嘆を詠んだ歌など、二十六首ある[8]。平家の都落ちによる資盛との別離が背景にあると思しい歌も多く見られる。

本稿末尾の【表】に、二種類の七夕歌を区別できる形で示し、この分類を反映させている。以下、【表】から分かることを述べてゆく。

まず、歌群後半に右京大夫自身の境遇を詠んだ歌が頻出する。特に⑥から⑧では、七夕後朝の歌以外に七夕そのものが主題となる歌は見当たらない。これは、後朝の歌が他の七夕歌と異なり、各群の区切りとして配されたものであることを示唆している。

さらに、各群内は概ね、七夕伝説や風習を詠んだ歌の後に、右京大夫自身の境遇を詠んだ歌を配し、七夕後朝の歌で締めくくるという形になっており、これが各群内の配列の基本方針であったと解される。一例として、②の六首を挙げておこう。

聞かばやなふたつの星の物語りたらひの水にうつらましかば（277／②）
世々ふともたえん物かは七夕にあさ引く糸のながき契は（278／②）
おしなべて草村ごとにおく露のいもの葉しものけふにあふらむ（279／②）
人かずにけふはかさましからころも涙にくちぬ袂なりせば（280／②）
彦星のゆきあひの空をながめても待つこともなきわれぞかなしき（281／②）
年をまたぬ袖だにぬれししのゝめに思ひこそやれ天の羽衣（282／②）

277番歌、279番歌はそれぞれ、盥の水に二星を映して見る、芋の葉に置いた露を集めて硯の水にするといった七夕の風習と関連する歌、278番歌は七夕の契りの永遠性を詠んだ歌である。この三首に続き、牽牛織女にも厭われる「涙にくち」た我が袂を詠んだ歌（280）、年に一度は逢瀬のある牽牛織女にも劣る「待つこともなき」我が身を詠んだ歌（281）、そして七夕後朝の歌（282）が配されている。

なお、③及び④のように、この配列とは異なる部分もある。④については、四節で歌群の位置づけを考える際に注目するが、③は、他の部分と比べて歌数が多いなど、配列以外にも例外的な点がある[9]。若干の問題を残すが、各群内は一定の方針に基づいて配列されていると見なすことができるだろう。

以上、各群内の配列を踏まえてみると、七夕後朝の歌が歌群内の区切りであることは明らかで、五十首は八群に区分できる形で配されていると言える。つまり、七夕歌群では、五十首の七夕歌をただ並べるのではなく、五首から七首程度を一組として配置してゆくという方法が採られているのである。

こうした配置から想起されるのは、やはり毎年七夕の日に詠む七首の七夕歌ではないだろうか。実際、歌群の冒頭と末尾で意識されていたのは、七夕の風習の中で歌を詠むということであった。さらに、歌群後半になるほど、源平の動乱を経た右京大夫の境遇と深く関わるような歌が増えることを勘案すると、①から⑧の八群は、それぞれ七夕の風習の中で詠み続けてきた「年々」の七夕歌として、年次順に配されたものと捉えられるのである。

勿論、五十首すべてが実際の詠作年次に基づいて順に配置されていると考えているわけではない。そもそも、各歌が詠まれた時期や場を特定することは困難である。本節で指摘しておきたいのは、配列面から見たとき、この歌群は、七夕という、毎年決まって訪れる詠作機会に詠み続けた歌の集成として、右京大夫の過ごしたある時代を順に辿るような形で構成されているということである。

ここで問題となるのは、どのような構想のもと、こうした配列が採られたのか、ということだろう。年次順の配列とい

う方法が採られた意図については、資盛と別れた後、後鳥羽天皇に再出仕するまでの「時間的空白を繋ぎ埋める」[10]ためとする従来の見解もあるが、この点については四節であらためて検討する。次節では視点を変えて、七夕歌群の表現を確認してゆくこととしたい。

三、七夕歌群の表現

前節では配列面から七夕歌群を検討してきたが、本節では表現面から考えてみる。表現に関しては、『金葉集』のいずれかの系統に含まれる歌と類似する歌の存在が指摘されているが[11]、本稿が注目するのは、一般的な七夕歌と比べたとき、浮かび上がってくる特徴的な七夕歌である。

配列を検討する際に、五十首の七夕歌を、七夕伝説や風習を詠むことを主題とする歌と七夕に寄せて右京大夫自身の境遇を詠むことに主眼を置く歌の二つに分類したが、特徴が現れやすいのは、やはり後者だろう。ただし、右京大夫の境遇と関わるような歌であっても、類例を多く見出せるものもある。

たとえば、「いとふらむ心もしらず七夕に涙の袖を人なみにかす」（289／③）や「よしかさじかゝるうき身の衣手はたなばたつめに忌まれもぞする」（312／⑦）のように、牽牛織女にも厭われる我が身という発想は、次に挙げるような、逢瀬をめぐっての恋歌や哀傷歌などに多く見られる。

七月七日にをむなのもとにつかはしける　藤原道信朝臣

としのうちにあはぬためしのなをたててわれたなばたにいまるべきかな　（後拾遺集・恋三・767）

七月七日ちちのぶくにて侍りけるとしよめる　橘元任

ふぢごろもいみもやするとたなばたにかさぬにつけてぬるるそでかな　（金葉集・秋部・160）

『後拾遺集』と『金葉集』の例を挙げたが、逢瀬を期待できない、あるいは喪に服する我が身は牽牛織女にも厭われるほどのものだという歌で、『右京大夫集』の場合と同様の発想によるものである。

他にも、「なげきても逢ふ瀬をたのむ天の河このわたりこそかなしかりけれ」（316／⑧）のように、牽牛織女の契りにも劣る我が身を詠む歌は、「たなばたもあふよありけりあまの河この渡にはわたるせもなし」（拾遺集・恋一・649）など、七夕を題材とした恋歌に多くの例を見ることができる。

以上の二つの発想に基づく歌は、繰り返し詠まれてきた、七夕歌の典型とも呼べるものである。こうした類例の多い歌がある一方で、七夕歌群には、他にあまり例を見ない歌もある。次に挙げる、牽牛織女に自身の境遇を訴えるような歌である。

あはれとや思ひもすると七夕に身のなげきをもうれへつ

るかな（283／③）
あはれとや七夕つめも思ふらむあふせも待たぬ身の契をば（287／③）
あはれともかつは見よとて七夕に涙さながらぬぎてかしつる（295／④）
秋ごとに別れしころと思ひ出づる心のうちを星は見るらん（307／⑥）
かたばかり書きてたむくるうたかたをふたつの星のいかゞ見るらむ（313／⑦）
書きつけばなほもつゝまし思ひなげく心のうちを星よ知らなん（317／⑧）
よしやまたなぐさめかはせ七夕よかゝる思ひにまよふ心を（320／⑧）

嘆きに沈む自身の境遇や「心のうち」を、それぞれ傍線部のように、牽牛織女に向けて直接訴え、さらには同情や理解を求めてゆく。歌群後半を中心に七首を数えることができるが、うち三首が「あはれとや（も）」という初句で始まるほか、307、313、317番歌も下句の形が類似する。『右京大夫集』では、こうした牽牛織女に訴えかけるような七夕歌も、ある程度は定型化していたことが窺える。

だが、七夕歌では通常、七夕に寄せて作者の境遇などを詠むことはあっても、それを牽牛織女に直接訴え、同情を求めるようなことはない。先に挙げた歌でも、逢瀬が途絶える、あるいは喪に服するなどした作者は、牽牛織女に忌み嫌われ、劣ると詠むだけであった。そもそも、七夕歌の定型は、牽牛織女の年に一度の逢瀬の様子や心境を作者が思いやるという形なのである。

それに対し、牽牛織女に右京大夫自身の境遇を思いやるよう求める右の七首は、一般的な七夕歌の対極にある、強い調子のものということになるだろう。類例も極めて少なく、『新勅撰集』以前では、次に挙げる『千載集』に採録された哀傷の贈答に限られる。

大炊御門右大臣かくれ侍りてのち、七月七日母の三位のもとにせうそくのついでにつかはし侍りける
大納言実家

たなばたにことしはかさぬしひしばの袖しもことに露けかりけり

返し
三位右大臣母

しひしばの露けき袖は七夕もかさぬにつけてあはれとやみん（千載集・哀傷歌・586・587）

涙に濡れる喪服の袖を供えないことにつけて、傍線部のように、織女も喪に服する身に同情を寄せるだろうか、という三位の歌である。わずかにある類例が哀傷歌であるところに注目されるが、牽牛織女に自身の境遇を訴え、思いやるよう求めるという発想は、右京大夫の七夕歌の特徴の一つと捉えることができるだろう。

他にも、七夕歌群には、類例の少ない特徴的な歌がある。今度は、各歌に用いられている語に注目してみよう。

一般に、七夕歌は類型化を避けられない面があるため、用いられる語もある程度は定まっている。たとえば、織女や乞巧奠を意味する「七夕」を詠み込む歌は非常に多く、七夕歌群内でも最もよく用いられている語である。[12] しかし、この歌群には、通常、七夕歌にはあまり用いられることのないような語も散見する。それは、「彦星」という語である。

彦星のゆきあひの空をながめても待つこともなきわれぞかなしき（281／②）

彦星のあひ見るけふはなにゆゑに鳥のわたらぬ水むすぶらむ（286／③）

何事をまづかたるらむ彦星の天の河原に岩枕して（290／③）

曇るさへうれしかるらん彦星の心のうちを思ひこそやれ（300／⑤）

彦星の思ふ心は夜深くていかにあけぬる天の戸ならむ（305／⑤）

えぞ知らぬしのぶゆゑなき彦星のまれに契てなげく心を（315／⑦）

右のとおり、七夕歌群の五十首のうち、「彦星」という語を詠み込んだ歌は六首ある。『右京大夫集』の七夕歌においては頻出する語である。[13]

「彦星」という語は、七夕伝説の登場人物、牽牛を意味するため、「七夕」という語と同様、よく詠まれているように思いがちだが、実はそうでもない。特に女性歌人はあまり用いることのない語である。ここで、『右京大夫集』の特徴を探るため、『新勅撰集』までの勅撰集の傾向を確認しておこう。

「七夕」が、織女のみならず七夕の行事そのものを指すこともあるため、どの集でも頻出する語であるのに対し、「彦星」を詠み込んだ歌は、『古今集』に一例、『後撰集』に一例、『拾遺集』に四例、『新古今集』に三例、『新勅撰集』に二例を数えるにとどまる。[14] このうち、女性歌人によるものは、詞書から女性の詠と分かる、次の『後撰集』の一首に限られる。

かれにけるをとこの、七日のよまできたりければ、女のよみて侍りける　よみ人しらず

ひこぼしのまれにあふよのとこ夏は打ちはらへどもつゆけかりけり　（後撰集・秋上・230）

七日の夜にやって来た、疎遠になっていた男を「彦星」と喩えたものである。「彦星」という語をめぐるこうした傾向は、私家集などでも同様で、やはり女性歌人によるものはわずかなのである。[15]

なお、「彦星」という語を用いた女性歌人の詠歌の内容については、次の二通りに大別できると思われる。先の『後撰集』のように、七夕の日に訪れた男を「彦星」と喩え、恋の相手と結びつけて詠むか、あるいは七夕歌群内の「曇るさへ

うれしかるらん彦星の心のうちを思ひこそやれ」（300／⑤）のように、七夕伝説における牽牛そのものを詠むかである。

七夕歌群の「彦星」に戻り、あらためて六首を概観してみよう。286番歌や290番歌は牽牛織女の逢瀬の様子について、300番歌は逢瀬を心待ちにする牽牛を思いやったもの、305番歌や315番歌も七夕後朝の牽牛の心境を詠んだものである。281番歌は、逢瀬を期待できない我が身の悲しさを詠むことを主題とする一首だが、ここでの「彦星」も牽牛を指すと見られる。つまり、七夕歌群の「彦星」は、すべて牽牛そのものを表すと考えてよい例であり、恋の相手、資盛と結びつけなくても解せる歌である。

しかし、他の歌人と比べたとき、右京大夫の「彦星」への関心の高さは際立つ。これはやはり、「彦星」が恋の相手を連想させる語であるところに由来すると見るべきではないだろうか。『右京大夫集』は、その全編を通して資盛のことが大きな位置を占める作品であるが、七夕歌においても資盛を彷彿とさせる語は多用されているのである。七夕歌群は、作品全体と共通する様相を示しているのである。

ところで、以上の七夕歌群の特徴を踏まえたとき、あらためて注目されるのは、歌群を締めくくる末尾の一首である。

このたびばかりやとのみ思ひても、又数つもれば
いつまでか七の歌を書きつけん知らばやつげよ天の彦星（321）

いつまで七夕歌を詠み続けるのだろうか、教えてほしいと「天の彦星」[16]に訴えかける。この一首には、本節で確認してきた特徴が凝縮されていると言えるだろう。おそらくは歌群の締めくくりとして意図的に配置された歌だが、そこには右京大夫の七夕歌の特徴が端的に現れているのである。

以上、一般的な七夕歌と比較することによって浮かび上がる七夕歌群の表現面の特徴を二つ取り上げた。「彦星」という語の多用に『右京大夫集』全編との共通性を見たが、自らの境遇を訴え、理解を求めようとする七夕歌もまた、『右京大夫集』の根底にある、自らの経験を書き記し、共感されることを願う姿勢と通ずるものだろう。右京大夫の七夕歌には、『右京大夫集』そのものへとつながるような特徴的な歌も含まれているわけである。

一方で、七夕歌群には、本節冒頭で述べたように先行歌の表現を摂取した、周辺歌人との関わりを想定できる七夕歌[17]もある。こうした多様な七夕歌の併存こそが、七夕歌群の特質ではないか。それは、七夕歌というものの詠まれ方とともに考えるべき問題であり、七夕を題材とする歌群が編まれることとなった背景にもつながってくるだろう。

では、この『右京大夫集』そのものにも通ずる面を有する七夕歌群をどのように位置づけてゆくべきか。次節以降で検討する。

四、七夕歌群の位置づけ

ここまで、配列と表現の二つの面から七夕歌群を検討してきたが、『右京大夫集』において、この歌群はどのように位置づけられるのだろうか。

七夕歌群の位置づけを考えるにあたって注目したいのが、二節で配列を検討する際に言及した、④冒頭の次の一首である。

何事もかはりはてぬる世の中に契たがはぬ星合の空（292／④）

この歌は、二節で確認した配列の基本方針から外れ、④の冒頭に置かれていた。内容は、変わり果ててしまった「世の中」に対する感慨を七夕に寄せて詠んだというものである。同様の歌として、「世中は見しにもあらずなりぬるにおもがはりせぬ星合の空」（309／⑥）を挙げることができるが、292番歌以前には、こうした「世の中」の変化を明確に詠んだ歌は見られない。292番歌を境として、歌の内容に差異が生じているようなのである。

そこで本稿では、この292番歌を、歌群の転換点となる一首として、配列の基本方針から外れる形で置かれたものと捉えた上で、検討を進めてみたい。

まず、転換点としての292番歌にあらためて注目する。この歌に言う「世の中」の変化とは、やはり『右京大夫集』後半部（204～356）に記される、平家の都落ちに始まる社会情勢の変化のことだろう。以下に引用するのは、はじめて一連の騒動に直接言及した後半部の冒頭である。

寿永元暦などのころ、世のさわぎは、夢ともまぼろしとも、あはれともなにとも、すべて〳〵いふべきにもなかりしかば、よろづいかなりしとだに思ひわかれず、中々思ひも出でじとのみぞ今までもおぼゆる。見し人々の都別ると聞きし秋ざまの事、とかくいひても思ひても、心もことばもおよばれず。〔略〕またためしたぐひもしらぬうきことを見てもさてある身ぞうとましき（204）

後半部は、傍線部のように、平家が都落ちし、滅亡に至る「寿永元暦などのころ」に対して、家集編纂時の視点も交えつつ、感慨を述べる一文から始まる。この後半部冒頭は、『右京大夫集』全編を通して見たとき、建礼門院徳子への出仕と資盛との恋を中心とする前半部（2～203）から、平家の都落ちとその後の日々を記す後半部へと、内容が大きく転換するところである。そのような転換点で、まず後半部が記述対象とする時代や出来事全体に言及するのは、これ以降の詠歌が、前半部とは異なる、変化に直面した後のものであることを明確に示すためだろう。

七夕歌群の292番歌についても、この後半部の書き出しと同様のことが言えるのではないかと考えている。つまり、④以

降の歌が、それまでとは異なる「世の中」の変化を経た後のものであることを明示するために、社会情勢の変化を詠んだ292番歌が④の冒頭に置かれていると想定してみるのである。

実際、この想定に基づいて歌群を見直すと、292番歌を境として歌の様相も大きく異なっていることに気づく。たとえば、七夕の年に一夜の契りに対して、292番歌以前には、「鐘の音も八声の鳥も心あらばこよひばかりは物忘れなれ」（272／①）や「契けるゆゑは知らねど七夕の年にひと夜ぞなほもどかしき」（273／①）のように、牽牛織女に同情を寄せる歌が置かれていた。しかし、292番歌以降は一転して、こうした歌が一切見られなくなるのである。

かわりに増加するのが、次に挙げる、牽牛織女の契りにも劣る我が身を詠む歌である。

彦星のゆきあひの空をながめても待つこともなきわれぞかなしき（281／②）

心とぞまれに契りし中なればうらみもせじなあはぬたえまを（294／④）

天の河けふのあふせはよそなれど暮れゆく空をなほも待つかな（296／④）

浦やまし恋にたへたる星なれや年に一夜と契心は（297／④）

七夕の契なげきし身のはてはあふせをよそに聞きわたりつゝ（302／⑤）

なげきても逢ふ瀬をたのむ天の河このわたりこそかなしかりけれ（316／⑧）

引く糸のたゞ一筋に恋ひ〳〵て今宵あふせもうらやまれつゝ（318／⑧）

七夕歌群には、右のように、年に一度は確実に逢瀬をもつ牽牛織女と違い、逢瀬を期待できない我が身を詠んだ歌が七首ある。一首を除いてすべて292番歌より後に配置されており、牽牛織女への同情を詠んだ歌と入れ替わる形で増加している。この中には、傍線部のように、牽牛織女への羨望の念を直接的な表現で示した歌もある。また、特に294番歌には「心とぞまれに契りし中」、すなわち自分達の意思で約束した「年に一夜」の契りだとあり、牽牛織女を思いやる様子は全く見られない。292番歌以前にあった牽牛織女に同情を寄せる歌とは、明らかに様相が異なっているのである。

このように、歌の様相からも、292番歌が歌群の転換点であることは確認される。特に、292番歌を境として牽牛織女が同情から羨望の対象へと変化している点に注意すると、転換点の背景には、牽牛織女のように年に一度の逢瀬をもつことも叶わなくなったこと、すなわち資盛との別離があることも窺えるだろう。やはり、292番歌は、先に見た後半部の書き出しと同様、以降の歌を源平の動乱による「世の中」の変化に直面した後のものとして明示するために配置された一首なのである。

では、292番歌を後半部の書き出しと重ね合わせた上で、この歌群を捉え直してみよう。まず、292番歌以前の①②③は『右京大夫集』前半部が記述対象とする時代に相当することになる。勿論、292番歌以前にも、「待つこともなきわれぞかなしき」（281／②）のように、資盛との別離後の心境を詠んだとも解される歌はあるが、これらを資盛との思うようにならない恋の中での歌と見れば、292番歌以前を前半部に記される内容と重ねて捉えることも十分可能である。

そして、④から⑧は、後半部冒頭から歌群直前までが記述対象とする時代に相当するものではないだろうか。つまり、七夕歌群を、『右京大夫集』前半部から歌群直前までに記されてきた時代を反映するものとして考えたいのである。

従来、七夕歌群は、資盛と別れた後、後鳥羽天皇に再出仕するまでの「時間的空白を繋ぎ埋める」[18]ものとされてきた。確かに、七夕歌群の後にも後鳥羽天皇への再出仕歌群が続いている。しかし、『右京大夫集』の中核をなすのは、歌群直前までに記されてきた時代で、再出仕歌群はあくまで後日談といった類のものだろう。そもそも、『右京大夫集』は日記的な性格を有してはいるが、厳密な意味での日次の記ではない。特に前半部には、時間の推移に従った配列をとらない部分もある。後日談である再出仕歌群との時間的つながりを重視する必要はないはずである。

むしろ、七夕歌群を挟んで語られる二つの時代は、つながりようのないものであったと思われる。七夕歌群の直前までに記されたのは、徳子に出仕し、平家一門とともに過ごし、宮仕えを退いた後もなお、その影響下にあり続けた日々である。一方の再出仕歌群では、かつての日々を慕いつつも、それとは違う新たな時代の到来を認識してゆく。まさに後日談であり、記述の基盤が異なるのである。[19]

七夕歌群は、このように基盤を異にする再出仕歌群に入る前に、それまで記してきた時代を再確認し、締めくくるという構想のもと、配置されたと考える。二節で確認した七夕歌群の配列も、過ぎ去った時代を順にふり返るにあたり、ふさわしいものであったと言えるだろう。

以上、④の冒頭に置かれた292番歌に注目して、七夕歌群を考えてきた。七夕歌群は、歌群直前までに記されてきた『右京大夫集』の中心となる時代をふり返りつつ、締めくくるものと位置づけることができる。そして、この歌群を編むことは、資盛の追慕は勿論のこと、自らが経験してきた特異な時代そのものを捉え直し、定位してゆく行為であったと思われるのである。

五、七夕歌群の背景

前節では、『右京大夫集』における七夕歌群の位置づけを論じてきた。残る問題は、こうした歌群を編むにあたり、なぜ七夕という題材が選ばれたのか、ということだろう。本節

では、七夕歌群が形成される背景について探っておきたい。

まず、従来注目されてきたのは、次の一首である。

秋ごとに別れしころと思ひ出づる心のうちを星は見るらん（307／⑥）

傍線部には、秋ごとに資盛と別れた頃だと思い出す、とある。平家の都落ちが寿永二年（一一八三）七月のことであったため、七夕は資盛との別離を連想させるものとなったのである。右京大夫にとって七夕が特別な意味をもち、資盛の追慕という『右京大夫集』の主題に叶うものであったことは明らかである。

ただ、こうした追慕と七夕歌の結びつきは、『右京大夫集』に限定されるものではなかったようである。七夕の哀傷歌とも呼べるような歌は、『右京大夫集』以外でも見出すことができるのである。これも、歌群が形成される背景を捉える上で重要なことだろう。七夕の哀傷歌の例を、八代集からいくつか具体的に取り上げてみる。

勅撰集において、はじめて七夕の哀傷歌が見られるのは『後拾遺集』で、雑部の哀傷歌群に二首ある。

後冷泉院うせさせたまひてよのうきことなどおもひみだれてこもりゐてはべりけるに、後三条院くらゐにつかせたまひてのち七月七日にまゐるべきよしおほせごとはべりければよめる　周防内侍

あまのがはおなじながれとききながらわたらむことのなほぞかなしき　（後拾遺集・雑一・888）

故中宮うせたまひてまたのとしの七月七日に宇治前太政大臣のもとにつかはしける　後朱雀院御製

こぞのけふわかれしほしもあひぬめりなどたぐひなきわがみなるらん　（後拾遺集・雑一・897）

888番歌は、治暦四年（一〇六八）四月に崩御した後冷泉院に出仕していた周防内侍が、七月七日に再出仕を求められた際のものである。ここでは、ちょうど七夕の日に再出仕の要請があったために、七夕を題材とする形で歌が詠まれている[20]。897番歌の場合は、少々事情が異なる。故中宮（嫄子）が薨去したのは、長暦三年（一〇三九）八月。秋のことではあるが、七夕と直接的に関連する時期でもない。また詞書からは、追慕の思いを深めるような特別な出来事も窺えない。ただ七月七日という、牽牛織女の年に一度の逢瀬の日が、追慕の思いを抱き、哀傷歌を詠む契機となったと言える。

同様の例は、他にも挙げることができる。

大炊御門右大臣かくれ侍りてのち、七月七日母の三位のもとにせうそくのついでにつかはし侍りける　大納言実家

たなばたにことしはかさぬしひしばの袖しもことに露けかりけり

返し　三位右大臣母

しひしばの露けき袖は七夕もかさぬにつけてあはれとや

みん　（千載集・哀傷歌・586・587）

三節でも引用した『千載集』の贈答である。大炊御門右大臣（公能）が薨去したのは、永暦二年（一一六一）八月。やはり服喪中に廻ってきた七夕の日が、この贈答の契機である。

白河院御時、中宮おはしまさで後、その御方は草のみしげりて侍りけるに、七月七日、わらはべのつゆとり侍りけるをみて　周防内侍

あさぢはらはかなくおきし草のうへの露をかたみと思ひかけきや　（新古今集・哀傷歌・777）

『新古今集』の例である。[21] 中宮（賢子）の薨去は、応徳元年（一〇八四）九月のこと。この歌の場合、傍線部のように、硯の水にするために草葉に置いた露を集めるという、乞巧奠と関わる行為を目にしたことが歌を詠むきっかけとなっている。七夕の風習から追慕の思いが生じた例である。

このように七夕の哀傷歌に注目すると、七夕そのものが追慕の思いを呼び起こし、哀傷歌を詠む契機となっている例も多いことが分かる。[22] また、これらの歌において追慕の対象となる人物には、主君や親も含まれている。七夕は、牽牛織女の恋物語がもとになるものだが、哀傷歌の場合は恋の相手に限定されないのである。七夕の哀傷歌の広がりも窺えるだろう。

『右京大夫集』の七夕歌群を考えるとき、七夕自体が哀傷歌を詠む契機となり得るものであったことも、背景の一つとして看過できないことである。五十一首もの七夕歌から成る歌群は、やはり異例である。右京大夫の七夕に対する格別な思いに基づくことは間違いないが、こうした前例のない構想による歌群を支えたのは、先行する七夕の哀傷歌の存在であったと考えられる。

さらに、三節で確認したように、さまざまな七夕歌が併存するこの歌群の背景として、七夕歌そのものがもつ多様性にも注目しておきたい。まずは、七夕歌がどのように詠まれてきたのかを知る一つの指標として、『古今集』から『新勅撰集』までの勅撰集より、七夕に関連する歌を採録する部立を挙げてみよう。

古今集　秋歌上（11）、羈旅歌（2）、恋歌二（1）、雑歌上（2）、雑体（誹諧歌）（1）

後撰集　夏（1）、秋上（25）、秋中（1）、恋五（2）

拾遺集　秋（13）、恋一（1）、恋二（3）、雑秋（13）

後拾遺集　秋上（10）、別（1）、恋一（2）、恋二（1）、恋三（2）、雑一（2）、雑六（誹諧歌）（1）

金葉集　秋部（10）、恋部上（1）

詞花集（二度本）　夏（1）、秋（10）、恋上（1）、雑下（2）

千載集　秋歌上（7）、哀傷歌（2）、恋歌三（1）

新古今集　秋歌上（15）、哀傷歌（2）、離別歌（1）、恋歌二（1）、雑歌下（1）

新勅撰集　秋歌上（13）、雑歌五（物名）（1）

※（）内は歌数。

七夕が秋歌の歌材として定着していたこともあり、大半は秋部に採録されているが、注意したいのは、数首ずつながら、他の部立でも確認できることである。七夕の恋物語は、恋歌や離別歌、先に取り上げた哀傷歌など、実にさまざまな場面と結びつき、詠まれている。つまり、七夕歌は、いかなる状況下でも詠まれ得るような柔軟性をもつものであったと言えるだろう。

『右京大夫集』は、前半部と後半部（七夕歌群以前）で記される事柄が大きく異なる作品である。前半部は徳子への出仕と資盛との恋が中心となるのに対し、後半部は源平の動乱による変化と資盛の追慕を語ってゆく。前半部と後半部で右京大夫の詠作環境は大きく変わり、また資盛をめぐる詠歌も恋歌から哀傷歌へと変化するわけである。七夕歌は、こうした変化の時代にあっても詠み続けられるだけの多様性を備えている。資盛をめぐる詠歌の変化にも対応できるのである。

このように見ると、七夕歌は、『右京大夫集』が記す、徳子への出仕から源平の動乱とその後の日々という、大きく変化してゆく時代を捉え直す視点として、有効なものだったと言えるだろう。七夕は、いかなる時でも年に一度、必ず廻ってくる詠作の機会である。変化の時代を過ごした右京大夫にも詠まれ得たのが七夕歌なのであり、詠み続けられた多様な七夕歌は、右京大夫が自身の経験した特異な時代をふり返る際、格好の題材となったのである。

六、おわりに

以上、本稿では、私家集としては異例な五十一首の七夕歌から成る七夕歌群について、配列面や表現面から再検討し、その位置づけを試みた。この歌群の根底にあるのは資盛への思いであるが、右京大夫にとって歌群を編むということは、追慕にとどまらない営みであったと思われる。それは、自身の経験した特異な時代を再確認してゆくことであり、失われてしまった日々の意味を見つめ直すことである。

これは、『右京大夫集』そのものを編纂する際にも志向されたことだろう。『右京大夫集』は、資盛の追慕が中心となる作品ではあるが、すべての詠歌が追慕に収斂するわけではない。失われた時代のもつ意味や価値を確認すること、あるいは、かつての日々を家集の中に再構築し、描き出すことを意図して採録した詠歌もあったことだろう。そして、それは、後鳥羽天皇に出仕し、かつての日々とは違う次の時代をも見た右京大夫であればこその営みであったと思われるのである。

注

（1）井狩正司「建礼門院右京大夫集構想論のための覚書（一）―第一四番以下四〇首の題詠歌の配置の意図をめぐって―」（『語文（日本大学）』十五、一九六三年六月）。

（2）後藤重郎「建礼門院右京大夫集七夕歌に関する一考察」（『名古屋大学文学部研究論集』五二、一九七一年三月）、大林潤「建

礼門院右京大夫集成立に関する一推論―七夕の歌成立年時と後鳥羽天皇出仕時期―」（『国文学攷』六十、一九七二年十二月）、野沢拓夫「建礼門院右京大夫集について―上、下巻の間の擱筆の可能性などをめぐって―」（『語文（日本大学）』六六、一九八六年十二月）など。

（3）後藤重郎前掲注（2）論文。

（4）藏中さやか「建礼門院右京大夫の詠作手法―表現摂取という視点から―」（『神戸女学院大学論集』五二-二、二〇〇五年十二月）。

（5）後藤重郎前掲注（2）論文。なお、後藤氏は、各群内の配列は七夕の日の一晩の時間的経過にある程度沿ったものであると指摘する。

（6）以下、本稿では、321番歌を除く七夕歌群の五十首について、歌番号と【表】に示した群（①～⑧）を、（歌番号／群）の形で示す。

（7）七夕伝説や風習を詠むことを主題とする十六首を、さらに内容別に分類し、以下に歌番号を示しておく。

牽牛織女の様子を推量…271、284、285、290、299、300、301
牽牛織女に対する同情…272、273
七夕の契りの永遠性…278、293
七夕の風習…274、277、279、286、288

（8）七夕に寄せて右京大夫自身の境遇を詠むことに主眼を置く二十六首についても、注（7）と同様に示しておく。

牽牛織女にも厭われる我が身…280、289、312
牽牛織女にも劣る我が身…281、294、296、297、302、319
牽牛織女に自身の境遇を訴える…283、287、295、307、313、316、317、318、320

「世の中」の変化と七夕の永遠性…292、309
七夕につけての物思いや悲嘆…275、303、306、308、311、314

（9）③の九首については、後藤重郎前掲注（2）論文でも、「第三群（283～288）・第四群（288～291）と一応分けたのであるが、この両群を合はせて一群の歌、即ち一年分の七夕歌と考へられない事もない」とする。

（10）後藤重郎前掲注（2）論文。

（11）藏中さやか前掲注（4）論文。

（12）七夕歌群内に「七夕」（あるいは「七夕つめ」）を詠み込んだ歌は十七首ある。

（13）七夕歌群内に見られる七夕に関連する語について、多いものから順に挙げておく。

七夕（七夕つめ）…十七首、彦星…七首（321番歌を含む）、星…七首、星合の空…五首、天の河…三首

（14）『古今集』から『新勅撰集』までの勅撰集に採録される、「七夕」（あるいは「七夕つめ」）を詠み込んだ歌の数を各集ごとに示しておく。なお、（）内は七夕に関連する歌の総歌数。

古今集…七例（十七首）、後撰集…十四例（二十九首）、拾遺集…十八例（三十首）、後拾遺集…十三例（十九首）、金葉集…八例（十一首）、詞花集…十例（十四首）、千載集…九例（十首）、新古今集…七例（二十首）、新勅撰集…四例（十四首）

（15）右京大夫に次いで「彦星」という語を七夕歌に多く詠み込んだ女性歌人は和泉式部で、『和泉式部集』に二例（250、824）、『和泉式部続集』に二例（292、382）ある。

（16）なお、「天の彦星」は極めて珍しい表現である。『右京大夫集』の他には、『時明集』に一例（17）見られるだけである。七夕歌

群を締めくくる位置に配された321番歌の「天の彦星」は、資盛のことを意識した表現とも解されるだろう。

(17) 藏中さやか前掲注（4）論文で言及されているが、七夕歌群には、歌林苑歌人との関わりを想定できる歌もある。

(18) 後藤重郎前掲注（2）論文。

(19) なお、七夕歌群前後の記述基盤の違いについては、拙稿「『建礼門院右京大夫集』再出仕歌群の位置づけ」（『詞林』五一、二〇一二年四月）において論じたことがある。

(20) 同様に、七夕の日の出来事が契機となって哀傷歌が詠まれた例が、八代集にもう一例ある。

天暦のみかどかくれさせおはしまして、七月七日御忌はててちりぢりにまかりいでけるに女房の中におくり侍りける　清原元輔

けふよりはあまのかはぎりたちわかれいかなるそらにあはむとすらん

かへし　よみ人しらず

たなばたはのちのけふをもたのむらんこころぼそきはわが身なりけり　（詞花集・雑下・399・400）

(21) なお、『新古今集』にはもう一首、哀傷の七夕歌がある。

母の女御かくれ侍りて、七月七日よみ侍りける　中務卿具平親王

すみぞめの袖は空にもかさなくにしぼりもあへず露ぞこぼるる　（新古今集・哀傷歌・855）

「母の女御」（荘子）の没年は、寛弘五年（一〇〇八）七月十六日。七夕の季節とほぼ同時期のことであり、『右京大夫集』のように、七夕と追慕が密接に結びついた例だろう。

(22) 本節で言及していない八代集に見られる七夕の哀傷歌としては、他に、三節で引用した『金葉集』の橘元任の歌（秋部・160）がある。これは、父、能因法師の喪に服する中、廻ってきた七夕の日に詠まれた歌である。

本文の引用について、『建礼門院右京大夫集』は和歌文学大系（二〇〇一年、明治書院）に拠る。勅撰集は『新編国歌大観』に拠る。

【付記】本稿は平成二十一年度和歌文学会第五十五回大会（二〇〇九年十月二十五日、於朱鷺メッセ）における口頭発表をもとにまとめたものである。発表の席上及び発表後に御意見、御教示を賜りました諸先生方に心より御礼申し上げます。

（たんげ・あつこ　国際日本文化研究センター機関研究員）

【表】七夕歌群（二七一～三一一）

群	歌番号	
		年々、七夕に歌をよみてまゐらせしを、思ひ出づるばかり、せうそこにも書きつく
①	二七一	▼七夕のけさの天の河原にあさせふなづる舟のかぢの音もしるく
	二七二	鐘の音も八声ふやうに聞きしかど
	二七三	契りけるこよひの袖の露のまに
	二七四	声のあやなは知らじ七夕の
	二七五	契りねどしてはたまくらの
	二七六	音ばかりやは
	二七七	年にひとよと
	二七八	逢ふ星にかすむ
	二七九	空合のすらむ
②	二八〇	▼天さぎりのおりゐるながらの空
	二八一	河こぎはなれゆくながらの空
	二八二	舟のめかねぬる
	二八三	中のよそめや
	二八四	涙がちなる
	二八五	色をしぞ思ふ
	二八六	天の川あさせしら波
	二八七	世間かはらぬ
	二八八	開けばやなほ
	二八九	▼人おしなべて草村ごとにおく露のいくらこころもものかは
	二九〇	七夕のすずしき秋になりにけるかな
	二九一	▼年をまたぬ袖だにの空にしがらみとめてもまつこともなきあさぢふに
	二九二	彦星のゆきあひの空をしぞ思ふ
③	二九三	▼あはれとや思ひもすらむ七夕の袖の露かたしきをもうれへつるかな
	二九四	七夕の岩の枕はこよひこそ涙かからめ
	二九五	いく七夕のたびくかゆきかへるらむ
	二九六	▼彦星のたかゆきかへるらむ七夕つめふはらもゆゑ鳥の暮いそぐまの心つかひは
	二九七	七夕にけふやかタつめもはらもゆゑ鳥の暮いそぐまの心つかひは
	二九八	七夕にけふやかタつめもはらもゆゑ鳥の暮いそぐまの心つかひは
	二九九	▼何事をまづ心もしらず七夕の袖にみだれも織るなる身のこころもも
	三〇〇	何事のあかぬ別れのなみだにこそ涙かかる
	三〇一	涙む彦星のいかにも人なみなるなげきをもうれへつるかな
④	三〇二	河原に岩の露かたしてかな
	三〇三	▼何事もかはらぬ世の中に契りたがはぬ星合の空
	三〇四	▼心とぞまれぞまれに契りなくる糸よりもながき契はたえんず物
	三〇五	▼あはれとも思ふ心の中なれぱ草葉にかくる糸よりもながき契はたえんず物
	三〇六	▼あ浦天あはれとも思ふ心の中なれぱ草葉にかくる糸よりもながき契はたえんず物
	三〇七	▼あ浦天あはれとも思ふ心の中なれぱ草葉にかくる糸よりもながき契はたえんず物
	三〇八	▼あ浦天あはれとも思ふ心の中なれぱ草葉にかくる糸よりもながき契はたえんず物
⑤	三〇九	雲ぢはらふ袖や露けき岩枕苔のしたにも夜にうたて明けゆく天の戸ぞうき
	三一〇	宵のまに入しし月の影までもあかぬ心や深き七夕こそやれ
	三一一	▼七夕の契なけきし身のはてはあかぬ心やよそに開きわたり、
	三一二	露けきむれば心もつきて星合の空にふせよよ待つかな
	三一三	露けきむれば秋の心もつきて星合の空にみだちらぬる我思ひつもりて
	三一四	彦星の思ふ心の野辺にもまさるらん
	三一五	彦星の思ふ心は野辺にもまさるらん
⑥	三一六	▼七夕の秋風にあひ見る夜の袖の露はらはなん
	三一七	▼秋ことに別れしころと思ひ出づる心の袖のぬるはらはなん
	三一八	▼七夕にかしてなげくともかるる思ひうちをえしもかたらん
	三一九	▼世中に心はかしてなげくともかるる思ひうちをえしもかたらん
	三二〇	▼中に見しにもあらずなほどもなくわかはりせぬ星はなん
	三二一	かねはてもなにほやあらずなほどもなくわかはりせぬ星はなん
⑦	三二二	▼思ふことと書けどつきせぬ梶の葉にけふにあひぬるゆゑを知らばや
	三二三	▼よしかさじかるうき身の衣手はたなばたつめぬるゆゑを知らばや
	三二四	▼なかたはかりくるうき身の衣手はたなばたつめぬるゆゑを知らばや
	三二五	▼なかたはかりくるうき身の衣手はたなばたつめぬるゆゑを知らばや
⑧	三二六	▼なけきてもあふ瀬をたのむ天の河こぎはなれゆくながらの空をしぞ思ふ
	三二七	▼書きつくし思ひのたけを星よ知らなん
	三二八	▼たくひ糸のけさなきなげきにこのこの言の葉を星やいとは、ん
	三二九	▼たくひ糸のけさなきなげきにこのこの言の葉を星やいとは、ん
	三三〇	▼よしやまたなぐさめかはせむ七夕よか、る思ひにまよふ心を

※七夕後朝の歌（二七六、二八二、二九八、三〇四、三〇五、三一〇）を区切りとして点線を引き、①～⑧の八群に分けた。さらに作者自身の境遇を詠んだ歌（二七六、二八二、二九八、三〇四、三〇五、三一〇）を区切りとして点線を引き、①～⑧の八群に分けた。さらに作者自身の境遇を詠もうことに主眼を置く歌（二節及び注（8）参照）に▼を付した。